

ブダペスト通信

盛田 常夫



2022年 NO. 33

オルバン首相の大名旅行と駐ウィーン大使館責任者の解任

ー 「東欧の小プーチン」になったオルバン・ヴィクトル



Die Presse (22.08.2022 um 18:10 Von Christian Ultsch)

全国気象観測所（気象サービス）所長・副所長解任

8月20日の花火大会の延期決定の後、気象予測を誤ったとして、パルコヴィッチ工業大臣が全国気象サービス（OMSZ）の所長と副所長を解任した事件は尾を引いている。

そもそも、全国気象観測所は気象予測モデルの計算にもとづいて75-80%の確率で嵐の襲来を予測し、政府の担当グループが花火大会の延期を決断した。政府の解任決定に反発するOMSZの部課長は、花火大会の前日から政府との協議を続けており、厳しい圧力に晒されていたことを伝え、大臣による所長と副所長の解任決定を撤回する連名書を提出した。

2006年の花火大会は、嵐の襲来によって、ドナウ河周辺で5名の犠牲者を出した。その経験から、悪天候が予測される場合には中止あるいは延期の判断が求められる。当時も、気象観測所は嵐の到来の可能性を予告していたが、政府はそれを真剣に受け止めなかった。

グヤーシュ官房長官は花火大会が直接の原因ではなく、これまでの仕事ぶりに満足していなかったからだと弁明しているが、明らかに気象予測をも政治問題化して捉える現政権の姿勢が現れたものだと考えるべきだろう。要するに、オルバン政権はあたかも気象観測所が政治的判断を下し、政権を傷つけるような判断を行ったと決めつけ、科学技術者に政治責任を取らせたのである。しかし、花火大会中止を決定したのは気象観測所ではなく、政府である。政府決定に加わっていた政治家の政治責任を問うことなく、科学技術者に責任を取らせるのはいったいどういうことだろう。まるでスターリン独裁体制時代のような出来事である。

政治責任を取らせるなら、科学技術者ではなく政治家であるはずだが、気象予測科学は不確実性の高い事象を対象としているから、天候問題で政治責任を追及することには無理がある。ところが、専制政治に慣れ親しんだFIDESZ政権は科学技術問題をも政治問題化することを厭わない。問題の性格にかかわらず、政権に忖度しない者は誰であれ敵として扱う。とても正気とは思われない。権力掌握を至上命令とする長期政権の奢りの結果だと言わざるを得ない。スターリンの弟子として、「東欧の小スターリン」と名

付けられたラーコシのように、オルバン首相は「東欧の小プーチン」のような振る舞いである。まさに歴史は繰り返される。

オルバン首相一行の大名旅行

この問題が取り上げられる中で、7月末のオルバン首相一行のウィーンへの大名旅行が脚光を浴びることとなった。この「外交的訪問」の名目は「ハンガリーは人種の混合社会を望まない」というオルバン首相の言明が欧州に波紋を投げかけていることに対する弁明である。しかし、夏休みの最中に、異常な人員規模でオーストリアを訪問したのは、少々気前の良い遠足旅行を兼ねて、政権担当者を労（ねぎらお）うとしたからだろう。トップ4名の宿泊費をオーストリア側が負担するなら、それほどの出費にならないと判断したのだろう。

7月28日、オルバン首相と3名の大臣が、車列を組んで2時間の超スピードで30名を超える政府官僚と警護人員を率いてウィーンに出向き、午前11時から30分ほど、オーストリア首相と会談した。しかも、オーストリアの外務大臣は夏期休暇中で、スィーヤルトー外務大臣は次官としか会談できなかった。夏休み7月末に、大仰にも首相と大臣3名が大名旅行する緊急性はまったくなかった。大臣の個別会談が行われたとはいえ、ほぼ午前中にすべての行事を終えることができた「大名旅行」だった。



オペラハウスに隣接する Hotel Bristol



ホテル・ブリストルの Opera Suite (president suite)

オルバン首相一行はその日のうちにハンガリーに戻るのではなく、ホテル・ブリストルに宿泊した。オルバン首相と大臣が宿泊したプレジデンシャルスイート（Opera Suite）は1泊6717ユーロだと言われている。幸い、首相と大臣3名の宿泊費はオーストリア側が負担したようだが、他の随行員の宿泊費はもちろんハンガリー政府の負担である。一行はこの日の夜、ウィーンの高級レストランで夕食を取った。夏休みの観光を兼ねた訪問だったことは間違いないが、ハンガリーの野党政治家は、「受入れ側が目を丸くしたオルバン一行の訪問」という記事を配信した。Die Presseは、その後に起きた事態を報道している（*Bitteres Nachspiel des Orbán-Besuchs in Wien*）。

当初、ハンガリーではオルバン首相の大名旅行が詳しく報道されることはなかった。国営放送は忖度報道に徹しているので、政権に傷つくようなニュースは一切報道しない。ところが、8月1日、この大名旅行の詳細が、ハンガリーの野党系のメディアで公開された。これに慌てたハンガリー政府は「機密情報」を漏洩した者の調査を始めた。それ

から 10 日ほど経って、在ウィーン・ハンガリー大使館高官解任のニュースが報じられた（8 月 13 日）。Dir Presse も 8 月 22 日の配信でこれを報じ、「この出来事が現在のオルバン・システムがどのように機能しているかを示すもの」だと指摘している。

外交官の罷免や解任は必ずしも「機密漏洩」だけではない。VALASZ online（2022.08.22）によれば、8 月 3 日にワシントンのハンガリー大使館員が、スィーヤルトー外務大臣の FOX NEWS インタビューでのログで不始末をしでかしたとして、本国に召還されている。インタビューが予定時刻より 30 分遅れ、しかもスタジオではなく、現場での取材になったことに、外務大臣が憤慨したことが理由のようだ。まるで菅官房長官が NHK の「クローズアップ現代」で、国谷裕子 MC に食い下がられて激怒したのと同じ構図である。これも権力者の奢りである。

隣国で連日悲惨な戦争が続いている時に、大名旅行を楽しんでいる場合ではないはずだ。本当に弁明することだけが目的なら、数名の同伴で、会談が終わったらすぐにハンガリーに戻って、無駄な費用を節約することができたはずだ。「儉約家のピューリタン」と呼ばれることを誇りとしている首相なら、なおさらのことである。父親を含めた一家全員が公金で焼け太っているのに、自らは預金がないほどに清貧に甘んじていると自負しながら、プライベートジェットでサッカー観戦し、公金で大名旅行することに、何の違和感もないらしい。不思議な人物である。

とにかく、今回の大名旅行は現ハンガリー政権の倫理性や道義性のレベルを知る上で、たいへん興味深い。